

# セイアとユニ

作・いぶき彰吾  
絵・川野隆司



「目立ちすぎない？」

母さんに言われて、セイアはつけたばかりのピンクのジャンプスーツに目を落とした。

「母さん、春には、ハイスクールよ。友だちはもつとオシヤレしてるの。」

「それでもねえ。」

コロナ期に子ども時代を過ごした母さんは、なにかにつけて心配性だ。

「収まりかけてたのにね。ハリケーンがなにかもめちゃくちやにしちやって……。」

ハリケーンで破壊された町では、ウイルスからの防御システムも働かなくなったのだという。

けが人であふれた病院や、家をなくした人々が押し寄せ

た避難所から、一気に感染が広がったという。

広がりの中で、新型に変異したウイルスが、地球上の人口を激減させた。母さんの両親も。

セイアは、こんなときの母さんの、光をなくしていくような目が苦手だ。

「じゃあ、つけ替えてくね。」

「外へ出るんだから、除菌コート忘れないでね。」  
「わかってる。」

セイアは、バスユニットの隣にあるドレスキューブにもどり、

「いつものユニフォームよ。除菌コートも。」  
と、ためいきまじりに指示した。

ドレスキューブは、四方からシャワーを飛ばし、セイア